東北大学大学院

国際文化研究科

広報

GSICS
PUBLIC INFORMATION MAGAZINE
No.25

http://www.intcul.tohoku.ac.jp

GRADUATE SCHOOL OF INTERNATIONAL CULTURAL STUDIES, TOHOKU UNIVERSITY

国際文化研究科　広報

No. 25

September 2012

CONTENTS

02 研究科長へのインタビュー
小林　文生 研究科長

05 東日本大震災から復旧の経緯
（『広報』No.24 以降）

06 震災ボランティア体験談
葉　　秉杰
目黒志帆美
半田　幸子

08 修士課程・博士課程
修了者からのメッセージ
GANBOLD ALTANTSETSEG
坂本　祐太
孟　　海蓉
ROXANA SANDU
張　　文宇

10 国際交流活動
吉田　栄人

11 研究紹介
山下　博司

12 最近の著作から
寺本　成彦

13 着任・退任の挨拶
青木　俊明
井川　眞砂
北川　誠一
宮本　正夫

15 山田誠教授追悼
川平　芳夫
浅川　照夫

16 INFORMATION
国際文化基礎講座（公開講座）
東北大学国際文化学会大会
国際文化研究科主催講演会
オープンキャンパス

研究科入試情報

TOHOKU UNIVERSITY

研究科長へのインタビュー

＜研究科についての質問＞

1. 国際文化研究科として一番力を入れているところと今後力を入れていきたいというところについて教えてください。

研究科の教育研究の中心にある「学際的・総合的」という理念を、より具体的な形でわかりやすく形に表すということに力を入れています。研究面では、科長裁量経費の配分にもとづく研究プロジェクトチームを毎年立ち上げており、講座の枠を越えた分野横断的な研究プロジェクトの創出を行っています。ここにひとつ力を入れています。教育面では、今述べた研究プロジェクトも含めて、進行中の研究をもとにして、これも分野横断的な教育カリキュラム編成を再構築しようとしているところです。同時に、附属言語脳認知総合科学研究センターを中心として先端的研究拠点形成を目指しています。このセンターと研究科内の３つの専攻との連携も含めて、今後、分野横断的な研究と教育を、研究科内にとどまることなく、外部つまり国内外の様々な機関と連携を取って推進できる体制を創出したいと考えています。

2. 国際文化研究科の院生は様々な学問領域の研究をしていますが、それぞれの院生たちが研究に専念できる環境整備の充実あるいは活躍促進についてなにか対応されていますか？

物理的な環境整備としては、講座研究室（いわゆる院生室）の設備等の充実が中心ですが、昨年の震災後は正直のところ、充実というよりも復旧が中心となっているのが実情です。物理的には厳しい点もありますが、できる限り充実させたいとは思っています。その一環になると思いますが、国際交流・学生支援室というのが西棟の２階にあります。国際交流と銘打ったのは、多言語チャンネルでニュースなどが見られるので、当初は特に留学生が母国のニュースに接することも含め、交流の場になるようにと設定しました。狭いかもしれませんが、活用してもらいたいと思います。

また、多様な分野に対応する環境という意味も含めて、活躍促進については、従来からの学位授与促進プログラムが軸となっています。積極的に国内外で学会発表をするように、これは、各講座ないしは教員レベルでそれぞれに対応しています。また、東北大学国際文化学会があるのはご存じの通りですが、これは厳密には研究科とは別組織ですが、この東北大学国際文化学会に全教員が関わって、院生が身近なところで研究発表をして次へのステップを踏めるようにと支援する態勢を取っています。ちなみに、日本国際文化学会というものもあり、先週末に私も参加してきたところですが、「国際文化学」をめざす若い研究者が多数参加して活況を呈しています。本研究科の院生諸君にもぜひ積極的に参加することをお薦めしたいと思います。

3. 院生同士の交流促進、言語コミュニケーション能力の向上、研究室の有効利用等の為に、異なる講座の院生研究室の合併または研究科共同の院生研究室があったらいいなと思いますが、先生はどう思われますか？

それは、良い視点だと思います。院生室について言うと、実は、19年前の研究科発足当初は、２ないし３講座が大きな一室に同居するという形態でした。これは、当時の院生数や設備の制限などという事情によるものでしたが、結果的には異分野間での活発な議論が日常的に行われて、院生が総体的に元気いっぱいでした。もちろん、あの当時は研究科ができたばかりだったので教員も学生もみんなで新しいものを作っていこうという雰囲気があったので余計活気があったのだと思いますが、あの雰囲気は、ぜひとも今の院生の皆さんにも味わってほしいものだと、私は思っています。と言っても、例えば合同院生室を設けるなどの実際の研究室再配置等については、現在進行中の震災の復旧工事と、近い将来に実施されることが期待されている耐震改修工事のこともにらみながら、慎重に考えなければなりません。ただ理念としては、合同研究室というのは、講座毎に分かれているよりも、魅力的だなとは思います。

4. また、研究科にも図書室があればもっと便利だと思いますが、それは可能でしょうか？

図書室についても、実は研究科発足当初からプランがあり、一時、「図書室」を整備したこともあったのですが、管理や人員配置などの問題があって、いつしか廃止されたという経緯があります。図書室は、とくにその運営の仕方が鍵となりますが、ほかの設備との関連も慎重に考慮した上で、うまくスペースを利用できるなら、あるに越したことはないと思います。そのためには、現在の講座資料室のあり方や、その他の配置の仕方等も含めて、総合的にしっかりと検討を重ねる必要があります。

5. 国際文化研究科の地域や世界との繋がりあるいは貢献について教えてください。

国際文化研究科と言う名前からしても、国際という言葉で表される様々な側面で連携し、貢献し、発信していくというのは、本研究科の使命だと思います。地域との関係では、研究科発足

当初より仙台国際交流協会との協力関係が続いており、これまでにも様々な事業を共催してきました。震災に際しては、仙台国際交流協会が立ち上げた「災害多言語支援センター」で翻訳・通訳の人員が不足しているということで、本研究科でボランティアを募り、研究科の教員と院生がボランティアで支援を続けました。今後も、必要に応じて支援を続ける体制にあります。

研究面では教員の個人レベルで様々に連携があると思いますが、組織レベルでの世界とのつながりでは、大学間協定校を中心とした研究・教育交流が続いており、フランスのレンヌ第2大学からは2002年以来、毎年1～2名の学生を学生交流枠で受け入れてきました。近年では、アジアの諸大学（例えば韓国の中央大学校や中国の北京大学、またタイのチュラロンコーン大学やタマサート大学）との交流が進められ、関係が深まっています。タマサート大学からは、ちょうど明日（7月13日）、3人ゲストを招いてシンポジウムを開く予定になっています。

6. 今後、国際文化研究科の学生に求める資質、身につけてほしい資質は何でしょうか？

少し答え方が抽象的になるかもしれませんが、学部時代に何かひとつの専門を身につけていますよね。そのひとつの分野の専門性を基盤としてそれを深めつつ、同時に広く、多面的な視点を持ってほしいです。そして、その視点に基づいて新たな領域を開拓していく柔軟性と視野の広さをぜひ身につけてほしいと思っています。この場合の「新たな領域」とは、必ずしも新しい学問領域ということではなく、広い意味での「文化」のあり方に新たな光を当てて、いわばものの見方についての新しい発見が生じることを期待しています。それが「国際文化研究」の基本理念ともつながると思うのです。やや抽象的な言い方ではありますが、そこが一番大事だと思っています。ついでに言えば、そのためには、自分の母語を含めた言語能力を身につけて欲しいと思います。全部同じ深さではないにしても、できるだけ多くのさまざまな外国語ができればいい、それに越したことはないと思っています。

7. では次に、先生ご自身についてお伺いしたいと思います。周りの学生含め、私達自身、テーマ設定から悩むことがあるのですが、先生ご自身は、学生時代、どのようにして研究テーマと出合ったのでしょうか？

小説が好きで、とくにフランスの作家のものを手当たり次第読んでいました。個人的な話ですが、もともと高校生ぐらいからだったか「自分っていったい何ものなのだろう」と考えをめぐらせてあれこれ読んでいました。そのなかで、マルセル・プルーストというフランスの大作家を読むうちに、自分自身のことを読んでいるような感覚に捉えられたのです。もちろん舞台は、19世紀末から20世紀初頭のフランスの貴族社会、ブルジョワ社会が中心であり、日本とはかけ離れているのですが、そこに私自身のことが描かれているような気がして、これは何なのだろうと奇妙な感覚を覚えました。

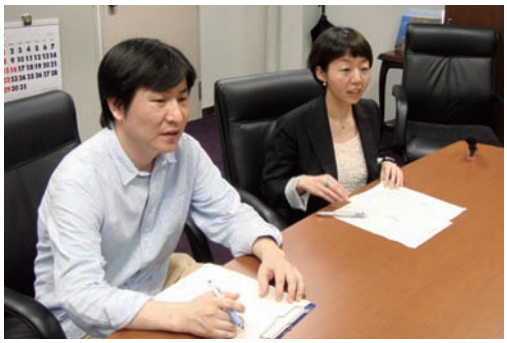
そこで、様々なプルースト研究者の論文を読むと、ものの語り方そのものが世界を造り替えるほどの力を持つのだということが分かってきて、一人称の語りというテーマを中心に、語りによる創造をめぐって研究を進めることになったのです。特に、『失われた時を求めて』の全訳も出版されている鈴木道彦先生の「一人称」を巡る論考には、その後の私の方向を決める大きな影響を受けたと感じています。それによって、先ほど言ったような「言葉が世界を創る」という確信のようなものを得て、自分が究めていくのはこれだと思いました。

8. では、現在のテーマに至るまで、それぞれひとつの線となって繋がってきているのでしょうか？それとも、どこかで転換点などはあったのでしょうか？

私の場合は、割と単純にひとつの線としてつながっていると思います。研究対象として扱う作家はずっとプルースト中心ではありますが、そのほかに、モーパッサンやサン=テグジュペリと変わっていったり、一時期は理論そのものに没頭したりという多少の紆余曲折は経ています。しかし、全体としては、ひとが何かを語ることの意味や様態を探るということと、またそれが人間の世界をどのように形成しているかという大きな問題につながっているように思います。

転換点とは違うかもしれませんが、この過程で、ツヴェタン・トドロフというブルガリア生まれでフランスの第一線で活躍している学者の一連の仕事に触れました。「文学の科学」という概念を提唱し、言語面から文学を探るとか、大きく言うと、言葉をめぐるあらゆる問題、すなわち文化、政治、社会、すべてをめぐって言葉から発して世界を語るという様態を研究しており、実に博覧強記な方の一連の著作を読み、そのいくつかを翻訳しました。それが、言葉の営みないしは言説のモラルなどについて広く考えるきっかけとなり、以来、文学を主たる対象としつつも、それにとどまらない言説一般のあり方に目配りをしながら、翻って改めて文学の言語に光を当てるという、言ってみればらせん状の作業を続けることになり、大変、充実感を覚えています。

9. 今のお話を伺っていて、文学研究に対する強い情熱が伝わってくるので次の質問が適切か分かりませんが、私自身の疑問でもあるため伺います。私自身、文化研究をやっていて、今の時代だからかもしれませんが自分の研究が直接世の中の役に立たないということから、文化研究をする意義が見出せなくなることがあるのですが、先生ご自身、長年、文学研究に携わられて、どのようにしてモチベーションを保ってこられたのでしょうか？



そう問われると、「モチベーションを保つ」という意識は抱いたことがないような気がします。ただ、大学に入った頃に、同じようなことを考えたことを思い出しました。文学をやって世の中にどんな役に立つのだろうか、趣味にしかならないのではないかと友人達と議論したことを記憶しています。それともうひとつ、日本人がフランス文学をやって何になるのか、と議論したことも多々ありました。質問されて改めて思いましたが、文学に話を限れば、文学に携わっている人はおそらく皆一度はそのことを考えるのではないでしょうか。

そこをどう過ごしてきたかという過程はぼんやりとしているのですが、今の思いで言えば、結果的には、文学に対して、私の場合は特にプルーストに関して、一種、信仰とさえ言えるような感じで没頭してきたように思います。それが傍目から見れば、モチベーションと言えるのかもしれません。言い換えると、これがある限り、自分は安心してこの世界にいることができるという支えのようなものでした。それが文学、特にプルーストだったのだと、今は感じます。喩えではありますが、一種、宗教みたいなもので、対象（文学）が持っている力が私に力を与えてくれて、その結果、続けてきたといえます。そう考えると、そのときには、これが世の中にどう役に立つのかという質問自体が消えていて、それを自分に対して自問する必要がないのだと思います。

10. ありがとうございます。伺っていて、それを強く感じます。では、震災後一年を経てお伺いします。昨年の『広報』でもお話しされていらっしゃいましたが、この研究科の果たすべき役割とは何でしょうか？昨年と比べて心境に変化はありましたか？

何よりも、自分を取り巻く世界を、正確に言語化できて、それを発信できる、そのような能力を持つ人間を輩出することが、この研究科の使命だと考えています。今言った「自分を取り巻く世界」とは、今眼前にある世界だけではなく、時間と空間をいずこにも設定できる、つまり、時代と地域を広く視野に入れた立場から世界に接することができるということです。昨年と比べて心境に変化はあったかという問いに対しては、変化はなく、むしろ、震災を乗り越えて昨年度の新学期を迎えたときの覚悟、世界へ向う姿勢が、そのまま継続して今に至っており、それがより強固なものになっていると感じます。

それは、一言で表すと「言葉の力」です。今や手垢にまみれた表現かもしれません。しかし、昨年度の研究科での入学式で新入生を前に挨拶を述べるに際して、いろいろ考えていて、最初に浮かんだのが「言葉の力」でした。状況を正しく把握できること、そして、自分の言葉で世界を正しく表現し、その世界像を明快に提示するための「物語」を構築できること、それがすべての第一歩です。それは実は大変難しいことであって、それができるためには、専門的な知見と深いモラルの力を備えていることが前提になります。そのような表現による発信自体が、すでに大きな役割を果たすことになるのだと思います。果たすべき役割という言葉を聞くと、具体的に、被災地に行って何かをするということが思い浮かぶとも思うのですが、特に「文化」というものを扱っている文系の人間が最初にきちんとできることは、今言ったようなことかなと思っています。

11. さきほどの先生ご自身についての質問とも関係があるのですが、私も含め私の周りの学生は、文化研究の学生が多く、実学ではないということで、昨年の震災を受けて自分の研究に意義を見出しづらくなっている人が多くいます。そんな学生がモチベーションを上げていけるようなお言葉をお願いします。先ほどのお答えでも十分とは思いますが、改めてお願いします。

「自分の研究に意義を見出しづらくなっている」というのは、おそらく、このような悲惨な状況で、自分にはいったい何ができるのか、ただ机に向かっているだけでいいのか、という自責の念にも似た自問なのだと思います。実は、これは皆さんだけではなく、とくに文系の多くの研究者が一様に感じたことだったと思います。目に見える形で貢献するということはごくわずかの人にしかできないと思います。例えば、医療、医学などはそれぞれの専門を生かして今の眼前のことに対応し、最大の力を発揮して貢献している訳ですが、それと同じような形で目に見える貢献はできないという人の方が実は多いと思います。実際、昨年5月に開催された日本フランス語・フランス文学会の全国大会においても、異例のシンポジウムが企画され、今このような状況にあってフランス語フランス文学を研究するとはどういうことなのかという自問にもとづいて、実に真剣な議論が行われました。

私も、被災地にある大学の人間として発言してきました。その様子は、学会のHP及び『フランス語フランス文学研究』という学会誌にも記録として残されています。私の発言の趣旨は、次のようなことです。「壊れた物は復元できても、傷ついた心は決してもとどおりにはできない以上、それを「もとどおりにしよう」と考えるのではなくて、むしろひとつの「変化」として冷静に受け止めて、それを自分の知力で正しく表現できることが、被災者であると否とにかかわらず大切だ。それは難しく時間のかかる作業だ。その意味で、語学も文学も自分が主体的に関わったぶんだけ自分のものになり、目に見えない「幸福」を目指して何かを的確に表現することばの力を得ることができる。今、このようなときだからこそ、語学、文学を研究し教育する意義がある。」語学・文学という私自身の研究・教育の分野にひきつけた言い方になっていますが、実は、おそらく同様のことが、ほかの文系ないしは文化研究の分野についても言えると思います。大切なのは、「自分が主体的に関わった分」つまり時間を費

やした分、という点です。

それを集約する言葉として、私が以前より座右の銘としている言葉、今までにもいくつかの機会でご紹介してきた言葉を、院生の皆さんにお贈りしたいと思います。「きみのバラの花がそんなにたいせつなのは、きみがそのバラに時間を費やしてあげたからだ。」よく知られたフランスの作家サンテグジュペリの『星の王子さま』の一節です。原文は、«C'est le temps que tu as perdu pour ta rose qui fait ta rose si importante.» 今の文脈でいうと、自分の研究対象の価値というのは、自分がそれにどれだけ本気で時間を費やしたか、それに応じて決まってくるものだといえると思います。私もいつからだったか、研究だけではなく、生活のあらゆる面でこの言葉がとても良く当てはまるということを感じました。子育てのときもそうです。原文のperduという単語の本来の意味は（もちろん慣用句でもありますが）、「失う」という意味で、一見、無駄に失うと思うことが実はそこから何かを得ることなのだということを教えてくれている言葉です。その言葉を皆さんにお贈りして、信念を持って時間をかけてくださいと言いたいです。時間をかけた分だけ、自分のものになります。

さらにもうひとつ、これは今年度の新入生オリエンテーションの際に、研究科長挨拶の中で引用した言葉です。中世フランスの偉大な文人であるフランソワ・ラブレーの言葉「良心なき知識は魂の廃墟にほかならない」というものがあります。原文は、«Science sans conscience n'est que ruine de l'âme.» 良心すなわち自らにくだす道徳的価値判断能力を基準として、人間としての尊厳と品格を保つことが、知識の探求の大前提であるということです。ただやみくもに知識を得るばかりでは、まったく意味はないのであって、大事なのは前提の部分ですね。そこをいつも研究する時の自分の基準にしていれば、「私の研究の意味は人間としてまっとうである」という自信を持てるのではないかと思います。

もうひとつ付け加えると、18世紀フランスの哲学者ヴォルテールの「自分の畑を耕さなければならない」です。原文は «Il faut cultiver notre jardin.» 世界には、あれもこれも、しなければならない課題は山積しています。しかし、個人の力には限りがあります。まずは、地道に自分の分野をしっかりと深めること、それが、結果的には世界へとつながっていくのだと思います。

12. 貴重なお言葉の数々をありがとうございます。励まされる学生も多いのではないかと思います。私自身、この3つの言葉を胸に刻み、研究面、生活面どちらにおいても挫けそうになったらそれらを思い出したいと思います。では、最後に、国際文化研究科に入学したい方と現役の学生にメッセージをお願いします。

今、二つの質問に答えた内容をそのままメッセージとしてお伝えしたいと思います。もう一言つけ加えれば、他の人には見えなかったものを、「こんなふうに見える」と示して見せることができるような力、それを身につけて、一緒に育んでいきましょう。

長時間ご質問に答えて頂きありがとうございました。大変奥の深い、貴重なお話を直接お伺いすることができて、とても嬉しく思います。ありがとうございました。

こちらこそ、真剣に質問をしていただいたおかげで、いろいろと考える良い機会となり、充実した時間でした。ありがとうございました。

(左)インタビュアー 国際経済交流論講座 DC3年 オルギル　(中央)小林研究科長　(右)インタビュアー 比較文化論講座 DC2年 半田幸子

東日本大震災から復旧の経緯（『広報』No.24 以降）

平成23年5月9日(月)　第1学期授業開始
5月16日(月)　《ライフライン》　下水道の復旧完了
6月2日(木)　建物の被害箇所に対する応急工事の竣工
（壁等のクラック等の発生箇所に対して、余震により剥離・脱落を防ぐ工事等）
8月12日(金)　第1学期授業終了
10月3日(月)　第2学期授業開始
※以降、例年通りの学年暦に戻る

平成24年4月～　建物の補修工事の開始
①4月中旬より　建物の外壁補修工事の開始
②4月中旬より　建物の内装補修工事の開始
③6月中旬より　建物の外壁補修工事の竣工

【国際文化研究科事務室前廊下】

（復旧前）

→

（復旧後）

国際文化交流論専攻
言語文化交流論
博士後期課程２年
葉　　秉杰

震災ボランティア体験談

動機

去年、震災が発生した当日、私は実は仙台におらず、当時の留学先の茨城県つくば市にいた。揺れ出した瞬間に既に異常を感じたので、すぐ外に逃げ出したが、「震源は茨城でなければ大変だ」と思った。まさか１ヶ月後に自分が引越する宮城県が震源地だとは思わなかった。大した被害は出なかったが、被災地の住民と同様に、何日間かの避難生活を余儀なくさせられた。しかし、それより、テレビで見た家屋が津波に飲み込まれたシーンの衝撃がよほど大きい。自分よりもっと悲惨な被災者がいると思うと気が重くなる。その後、無事に仙台に引っ越せたが、被災者の方々に何かをしてあげたい気持ちが募る一方だった。実は私は無償の奨学金を頂いているので、日本に留学できるのである。そこで、できれば何らかの形で日本国民に還元したいと考えている。ボランティアというのは私にとって、まさに恩返しするいいチャンスだった。

内容

震災直後、仙台市内だけでも幾つかのボランティアセンターがあった。私は自分が所属する講座を卒業したウクライナ人の先輩の紹介で、その中の一つである蒲生・岡田サテライトの行き方を知った。大学からだとおよそ15キロで、自転車で一時間弱で行ける。初めて参加する人はまず名前と連絡先などを専用のシートに記入し、保険証と名札をもらう。どんな作業をするかは日によるが、自分の経験からだと、ヘドロ出しや瓦礫拾い、草むしりなどである。

流れとしては、朝８時頃に集合する。その後、スタッフが当日被災者に依頼された内容をみんなの前で読み上げ、作業ごとに希望者をグループ分けして行う。現場まではそこに置いてある（たぶん各地から寄付されたであろう）自転車かボランティア活動に参加した方の車で移動する。また、水やカロリーメイトなどは無料で提供されてはいるが、昼食等は基本的に自分で持参する。

いよいよ作業開始。グループごとにリーダーが出発前にスタッフから指名される。リーダーの仕事は大体次の通りである：イ．グループのメンバーを作業現場まで案内する。被災地は津波にさらされたので、目印になる建物がほとんどなく、作業現場によって時々辿り着くのも一苦労。ロ．依頼者にあいさつし、作業内容を確認する。ハ．１時間を目安に休憩を１回入れる。気温が高い日や日陰のない場所で作業する日は熱中症になりかねないので、メンバーに気をつけながら休憩時間を調整することもある。ニ．作業終了後、依頼者に次の依頼があるか確認し、それをサテライトのスタッフに報告する。

感想

津波の力も想像を絶するが、一人一人の力で、めちゃくちゃだった被災地が少しずつ片付いてきたのを見ると、やはり人間も一丸となれば大きな力になるなぁと思う。そして、すごい達成感もある。私の出身地の台湾も11年前に大地震に見舞われ、当時日本から様々な援助を頂いた。私は直接に恩恵を受けなかったとはいえ、このように台湾人として日本に何かをしてあげられたのは大変嬉しいことである。ボランティア活動を通して、参加者であれ被災者であれ、日本の方々との触れ合い、交流ができるのは何と言っても大変貴重な経験だと思う。実際、友達も何人かできたのだ。

地域文化論専攻
アメリカ研究講座
博士後期課程３年
目黒 志帆美

震災後の自分を支えてきたボランティア活動
（ボランティア活動体験記）

2011年３月11日に発生した東日本大震災の後、私はしばらく途方に暮れていました。毎日増えていく犠牲者の数、原発事故の影響、なかなか復旧の目処が立たない都市ガス…不安が募る毎日でした。そして何よりも、自分の無力感に苛まれました。福島のテレビ局で報道記者として活動していた頃、2002年に発覚した東京電力の原発トラブル隠し事件に関連して、福島第一・第二の両原発に取材に行くことが度々ありました。あの時、記者としてもっと厳しく追及すべきだったのではないか、という後悔が頭をよぎり、防護服に身を包んで取材するかつての同僚たちの姿をテレビで見るたびに、焦燥感が募りました。そして、汚染されるふるさと福島を思い、怒りと悲しみでいっぱいになりました。

私は母親でもあるため、震災後は子供を守ることを第一に考えて過ごしていました。不安を抱えながら余震に怯える娘と二人で家にいると、「こんな状況ではもう研究は無理かもしれない」と悲観的な気持ちになりました。そんな時に、東北大学の学生たちがボランティア団体を組織し、復興支援活動を行っているということを知り、「東北大学地域復興プロジェクト“HARU”」のメンバーとして活動に参加させてもらうことになりました。

ボランティアとして初めて参加した活動は、東北大学附属図書館２号館の復旧作業でした。２号館は、平成２年の開館以降、国内外の新聞や学術雑誌を所蔵する東北の知の拠点として機能してきました。当館の所蔵する雑誌は数十万冊に及びますが、昨年３月11日の震災

とその後の余震で、書架に並んでいた書籍の6割以上が床に落下しました。一部の書籍は書架の脚の下敷きになるなどして破損し、書架自体も地震の衝撃で傾き、使えなくなってしまったものもあります。図書館での復旧作業は、落下した本を書架に戻し、余震で再び本が落下しないよう、ロープを書架にくくりつけるというものでした。作業は、休憩時間に手を休めるのも惜しいほど無心になって行いました。落下した本で床が埋め尽くされていた館内でしたが、ボランティアの学生たちの手で、整然と書架に収められていきました。こうした作業を進めながら、混乱して動揺していた自分の気持ちが、少しずつ平静さを取り戻していったように思えます。

私は家庭を持っていることもあり、メンバーの中ではあまり多くの支援活動を行っていない方ですが、それでも、できる限り大学や地域の復興のために力になりたいと思い、現在も細々と活動を続けています。先日開催された仙台七夕まつりでは、国内外から多くの短冊が仙台に寄せられました。HARUでは、兵庫県西宮市から寄せられた3000枚超の短冊を定禅寺通で飾り付ける作業を行い、私もその

お手伝いをしてきました。西宮市は、1995年に発生した阪神・淡路大震災で深刻な被害を受けましたが、目覚ましい復興を遂げているまちです。短冊には、「復興をお祈りしています」「がんばりすぎないで」といった心のこもったメッセージが書かれていました。一枚一枚、短冊を笹に飾り付けながら、前を向いてがんばっていこう、という気持ちになりました。復興支援活動は、被災した地域と人々のために行うものですが、私にとってのボランティア活動は、自分を見失わずに研究を続けていくための心の支えにもなっているのです。

震災ボランティア体験記

国際地域文化論専攻
比較文化論講座
博士後期課程２年
半田　幸子

今回の大地震が起きるまで、私はボランティアらしいボランティアとは無縁なまま過ごしてきました。地震が起きたときは研究科棟5階の院生室に1人でいましたが、小さな揺れの時点で、廊下に出ていたので、怪我はありませんでした。ただ、おそらく誰もが体験したようなパニックに陥りました。4月に入ってすぐ、ライフラインも大方落ち着き、食料確保もそれほど困難ではなくなっていた頃、私自身の身を持て余すようになりました。精神的にも物理的にも研究をできるような状態ではなく、ただ何もしないことに苛立ちを覚え始めていました。そこで、学校のホームページで紹介されていた、東北大学の学生と教員向けのボランティア団体（東北大学地域復興プロジェクト“HARU”）に登録しました。その後、団体本部の運営や山元町の避難所、県庁での災害保健医療支援室のボランティアなどに関わりました。振り返ってみると、私にとって初めて経験したボランティアというのは、被災地をなんとか助けたいという思いからだけではなく、あの状況下で自分自身が動いていないといられなかった結果だったのだと思います。何をやっても無力感でいっぱいでしたが、どんな形でも関わっていないではいられませんでした。山元町のボランティアでは、避難所でお年寄りや子どもの話し相手になって欲しいと言われました。しかし、私自身は、被災者の方はボランティアとはいえ突然見知らぬ人間がやってきて、それも日々違う人が話し相手になるということをどう感じているのだろうか、とすっきりしない思いでいました。何が正しいのか分からないままで、すべてが私にとっては混乱の中での取り組みだったと思います。そんななか一番記憶に残っている活動といえば、気仙沼の子どもたちのために開催された夏休み期間のサマースクールへの同行です。前述の“HARU”を通して知り合った他研究科の先生に声をかけて頂きました。サマースクールが行われた7月には、まだ避難所で生活をしていた子どももいました。それぞれが辛い思いをしていたはずですが、誰ひとり文句を言わず、元気いっぱいに遊んでいる姿が印象的でした。対象は小学校5、6年生でしたが、兄弟での参加に限って低学年の子も受け入れたため、結果的に小学1年生から6年生の子どもたちが25人前後参加していました。この企画の意図が、被災地の子どもたちに楽しい夏の思い出を作ってもらうと同時に、子どもを持つ家庭に少しの自由な時間を持ってもらうということで、3泊4日という少し長めの日程でした。それにも関わらず、「家に帰りたい」と言う子どもも、泣き出す子どもも1人もいなかったのが、とても印象的でした。また、私自身もボランティアをしているという感覚ではなく、一緒に楽しむことのできるものでした。私は常々、ボランティアとは結局のところ自己満足の要素が大きいと思ってきました。しかし、この活動を通して、相手の立場を思いやり、相手が楽しむこと、望むことを提供できるのであれば、そこにボランティアをする側の多少の自己満足があっても許されるのではないかと感じました。また、他の活動を通してですが、ボランティアの捉え方は人それぞれあり、考え方の異なるボランティア参加者と接することの難しさも経験しました。震災を経験したこと自体がそうですが、それまで考えたこともない非日常の中での様々な震災ボランティアの活動は、ボランティアについて、そして自分の生き方について考えさせられる貴重な経験となりました。

修士課程・博士課程修了者からのメッセージ

国際文化交流論専攻
国際資源政策論講座
平成24年3月
博士前期課程修了

GANBOLD
ALTANTSETSEG

「将来の始まり」

森の都仙台で学び過ごした日々の中で、修士課程の2年間がとても充実した学生生活でした。新しい物事を知るという楽しみと学ぶという喜びを感じて過ごした毎日でした。研究どころか日本語も苦手な私にとって初歩の日本語を始め、研究の基礎知識と能力を身につけることができました。国際文化研究科には世界各地の国々からの留学生が集まり、国際化が味わえる素晴らしい研究環境ができていると思っています。日常の研究勉強の他、国際的環境の中でお互いに学び合い、未知な文化について知り、素敵な仲間がたくさん出来、その中で新たな自分にも出会いをすることができました。単なる学術的知識を得る他、東日本大震災・強い地震を体験したことは人間としての大切な勉強になりました。

私の修士論文は『モンゴルにおける鉱物資源開発とその問題点』というテーマの下、現在モンゴルで開発される鉱物資源それに伴う様々な問題点についてデータを基に研究を進めて来ました。鉱物資源の世界的需要の高まりと価格の高騰をきっかけにモンゴルの鉱物資源が活発に開発されています。経済における鉱業部門の役割が拡大しつつあります。一方、鉱物資源開発・鉱業活発化を原因とする鉱山周辺の環境汚染・破壊、住民の健康被害、違法採掘などの問題が生じています。しかし、これらの問題点より経済的利益のみが重視されているのが現実であります。かつて日本も鉱業による公害問題に直面した経験があります。こうして公害問題を体験した国々から見習うべきではないか、鉱業政策を見直すべきではないかなど現在のモンゴルにおける鉱業問題の解決は容易ではありません。鉱物資源開発・鉱業部門における政策の改善、対策の提案を本論文において論じました。

修士論文の作成につき数多くの難題に直面する度、指導教員のデイニル・プシュパラル教授と研究室の皆さんから貴重なコメントやアドバイスを頂きまして論文を完成することが出来ました。上述しましたように、研究における基礎知識をはじめ修士論文を書くという難しい作業からたくさんのことを学び得たことをとても嬉しく思っています。将来において自分自身が社会のどんな領域においても貢献できる人材となれたら、それが国際文化研究科で学んだからだと誇りに思う時が来るでしょう。最後になりますが、今まで研究や生活の面において支えて頂きました講座の先生方と友達、そして家族に感謝の気持ちを申し上げます。

国際文化言語論専攻
言語科学基礎論講座
平成24年3月
博士前期課程修了

坂本　祐太

研究者になる夢を抱いて ―仙台で過ごした2年間の軌跡―

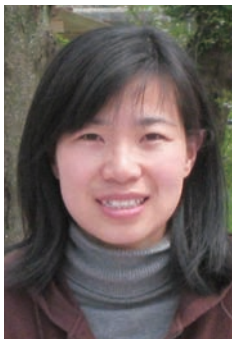
長年住んだ埼玉を離れ、東北大学に入学してもう2年が経ちました。私が研究者を目指すことになった経緯と、仙台での2年間の思い出を綴っていきたいと思います。

私は学部生のときに英語教育を専攻しており、地元の中学または高校の英語教師になるのが中学生の頃からの夢でした。「自分の生徒に英語を教えるには、自分が生徒の規範となる英語力を持つべきだ」。この信念から、北米への交換留学や資格の取得試験を通して、英語を一生懸命勉強しました。とりわけ英文法に強く興味を持ち、記述英文法の概説書を購読する英語学のクラスの先生（後の卒論の指導教官）に、「英語学を一生懸命勉強したいです」と伝えたところ、「この本を読んでみなさい」と渡されたのが、現在私の専攻する生成文法理論の解説書でした。初めは全く分からず、同じ個所を10回以上読み直す事もありましたが、少しずつ理解が深まっていくと自らの知的興奮が呼び起こされるのが分かりました。「こんなに面白い学問があったのか」「本気でやってみたい」、この思いから大学院に進学することを決意しました。ずっと関東圏に住んでいたので大学院は近くに星の数程あったのですが、私の興味関心と研究内容が近く、世界の一線で活躍している憧れの先生（現在の指導教官）が在籍している東北大学に入学を決めました。

入学してからは、「とにかく修士時代に1つでも人に認められる研究をしてやろう」と意気込み研究に没頭しました。「どの文献を読めば良いか」「どういった方向性で研究を進めるか」など、本当に細かいことから指導教官の先生に相談しましたが、先生はいつも進むべき道を示してくれました。先生との議論は常に興奮するものであり、ときには私的な相談にも乗っていただきました。修士論文は、A Study of Sluicing and Cleft in Mongolian: A Comparison with Japanese というタイトルで執筆し、その内容の一部は国際学会で発表することができました。英語での口頭発表は非常に緊張しましたが、自分の研究をたくさんの研究者の方々に聞いていただける喜びを感じることができた経験でもありました。

私の専攻している生成文法理論は北米を中心に発展してきている経緯があり、更なる教育環境並びに研究環境を求め、今年の8月から北米の大学院博士課程で5年間研究することが決まっています。自らの研究と留学の準備を並行することは心身ともに非常に辛いものでしたが、北米の大学院で博士号を取得している先生からの助言や様々な人の励ましを得て、何とか合格の切符を手に入れることができました。今は、憧れの北米大学院で思いっきり研究に打ち込めることが心待ちで仕方ありません。

私はこれまで多くの先生に影響を受けてきました。従って、自分の大好きな研究と教育を両立できる研究者という職業に就けた暁には、自分も学生と本気で向き合い、導くことができるような存在になりたいと考えています。



国際文化交流論専攻
言語コミュニケーション論講座
平成23年9月
博士後期課程修了
孟　海蓉

学問は一生の仕事

平成18年10月に宮本先生の知遇を得て、国際文化研究科言語コミュニケーション論講座に研究生として入学してから、平成23年9月に博士後期課程を修了するまで、ちょうど五年が経ちました。苦労の多い五年間でしたが、先生のおかげで多くを学ぶことができ、楽しい五年間でもありました。このたび修了に当たって、総長賞という大変名誉な賞をいただいたのは望外の喜びです。

私はずっと外国語の学習に興味を持っていました。大学の専門は英語で、その後スペン語も三年ほど勉強しました。日本語は大学院修了まであまり上達しませんでしたが、今も頑張って勉強しています。いろいろな言語に興味を持ち、言語現象を研究することは言語学の第一歩だと思います。言語学に興味を持ち、それを専門に研究することになったのは私にとって大変好運でした。やはり自分が好きなことを研究をするのはいくら苦労しても楽しいことだと思います。この分野を生涯ずっと学び続けたいと決意しています。

幅広い学問の中で、研究課題を見つけるのは難しいことだと思います。私の周りでは日本在住の中国人家族が多く見られたため、日中バイリンガル幼児の第一言語習得に関する研究に注目しました。博士論文は日中バイリンガル幼児三名を研究対象とし、三年間に渡り収集した約300時間の録音データに基づき、言語習得の初期段階におけるコードスイッチング（言語の切替）の言語的制約を明らかにすることを目的としました。考察の内容はコードスイッチングにおける言語的制約に関する先行研究が最も多く依拠している理論的枠組みの一つをめぐり、日本語と中国語のコードスイッチングデータを用いて、その普遍性を検証するとともに、理論の一部修正を通して、有効性の向上を図ることでした。

論文執筆の間、多くの励ましと貴重なご助言をいただきました。ここで、講座内外の諸先生方に心から御礼申し上げます。そして事務係の方々、院生の友人たちと家族にも感謝の気持ちを申し上げます。

学問の道には終わりがありません。これからも人生を更に豊かにするために一緒に頑張りましょう！

国際文化言語論専攻
言語教育体系論講座
平成24年3月
博士後期課程修了
（現：専門研究員）
ROXANA SANDU

「日本語講師」から「研究者」への道

私はルーマニアから第二の故郷である東北地方に平成17年に再来日し、それからずっと本研究科の言語教育体系論講座に在籍しています。博士後期課程に入ってからは4年間をかけて博士論文を完成させ、今年3月に博士号を授与されました。 現在は、同講座で専門研究員として研究活動をさせていただいています。

ルーマニアの大学を卒業してから、すぐに日本語講師として働き始めたため、東北大学に来る前は、研究生活の経験はわずかしかありませんでした。そのため、大学院に入学してからもたくさんの間違いをしましたが、先生方の辛抱や指導のおかげで、研究者とは何か、研究とは何かということを少しずつ学ぶことができました。 それまでの留学経験と異なり、日本語や日本の文化を学ぶだけではなく、研究生活に伴う苦しみや楽しみを味わうことができたことは、一生忘れられない経験になりました。

12年前に初めて来日した時、日本の伝統的な文化とは別に、日本人と円滑にコミュニケーションをとるためにはどのように振る舞うべきか、どのような表現を使用するべきか、ということの難しさを知り、逆にそこに魅力を感じました。外国語を勉強する際、初級段階で、感謝や詫びを表す表現を覚えます。しかし、日本語の詫び表現は多面的で、「詫び」以外に「感謝」、「断り」、「依頼」など本来相手に損害が発生していない場面でも詫び表現が頻繁に使用されます。このことに気づいてから、日本語ではこれらの表現がどのように使い分けられているのかということに興味を感じ始めました。これが私の博士論文のテーマの出発点となりました。

私の研究は日本語語用論という分野に属します。「日本語の詫び表現の語用論 ―「ごめん」、「ごめんなさい」、「すみません」の謝罪機能と謝罪以外の機能について」というテーマで研究を行いました。発話者の情意表現としての日本語の詫び表現にみられる言語標識と表現形式の変更を研究対象として、主に「すみません」、「ごめんなさい」と「ごめん」を分析対象としました。さらに、「申し訳ありません」、「申し訳ない」、「悪い」なども共に考察しました。最終的な目的は、語用論的機能、情意、言語標識、コンテクスト、表現形式の変更などの観点から日本語の詫び表現の用法を解明することでした。

日本語の詫び表現のディスコース・サンプルを日常生活の広い範囲の場面から収集するため、異なるジャンルのテレビドラマを対象にしました。収集したデータを分析しながら、どのように日本語の詫び表現では情意が伝えられているかを考えることで、自分の日本語の習得過程を改めて振り返り、日本語におけるコミュニケーション・パターンの理解を深めることができたと思います。日本語教育の現場に戻ったら、このような知識や経験を活かしたいと思います。

博士論文を書き上げることは簡単なことではありませんでした。でも一方で、一つの研究が仕上がるまでの過程に楽しみを感じるという体験ができたことは、研究のつらさを乗り越える上で一番の助けとなりました。そして、研究生時代からお世話になった島途健一先生と志柿光浩先生からの励ましの言葉のおかげで、いくら不安になっても、いくら悩んでも、前に進むことができ、最終的に博士論文を仕上げることができました。研究生活は苦しみに満ちていますが、研究とは本来楽しいことだということに気づくことができれば、それまで苦しかったことも苦ではなくなるのではないかと私は思います。これからも、博士論文執筆の経験を通して学んだ多くのこと、多くの知識を大切にしながら、研究生活を楽しんで行きたいと思います。

国際文化交流論専攻
国際資源政策論講座
平成24年3月
博士後期課程修了
張　　文宇

課題の設定能力と解決能力を備える人材を求める社会

私は、平成24年3月に本研究科の博士後期課程を修了し、博士学位を授与されました。この辛くて楽しい研究生活は、私にとって、長いものでしたが、短かったようにも感じます。環境問題に対して自分のやるべきこと、何ができるか模索中の人は、多方面から環境問題に取り組んでおり、私が今年3月までに在籍した国際資源政策論講座で、自分なりのアプローチを見つけられるのではないでしょうか。在籍した講座は、学生に楽しく学ぶことのできる場を提供し、学術の面のみならず、実践的な面でも、環境問題に関する自由な討論と自由な思考ができる環境を備えています。本講座では、単に研究対象が多岐に渡っているだけでなく、様々な学部から多種多様なバックグラウンドを持った人が集まるので、各々の専門分野のみならず専門外の知識についても幅広く学べるのが長所であり、魅力だと思います。

この恵まれている研究環境のもとで、私の博士論文では、「中国におけるセメント産業の環境負荷削減可能性に関する研究―CDM事業の評価と二酸化炭素削減の課題を中心に―」という題目のもとで論考を重ねてきました。この研究は、中国セメント産業の二酸化炭素の排出状況を把握しながら、中国セメント産業におけるクリーン開発メカニズム（CDM）事業の発展現状と問題点を評価したうえで、今後の中国セメント産業による温暖化抑制戦略の方向性及び望ましい低炭素産業発展のあり方を提示しました。

学位論文を執筆した当初にオリジナリティある課題設定、解決方法の追求及び論理的な思考などの様々な面でかなり苦労しました。現代社会は、「課題解決能力」だけでなく、「課題設定能力」を、次世代を切り開く人材に求めています。この二つの能力が今後の職場で必ず相乗効果を生むと考えます。一卒業生として、学生時代の貴重な時間をこの専攻での研鑽に充てることを強く推薦したいです。私は環境研究者として歩き始めたばかりですが、本講座で学んだ知識、常に環境学的意義を意識した研究姿勢、研究室生活、人とのつながりなど、全てが今後の糧となると思います。

最後に、本人の博士論文を執筆するにあたり、多くの方々のご助力をいただきましたことを心よりお礼を申し上げます。プシュパラール　ディニル教授、重野芳人教授には、修士課程からの6年間、温かく見守っていただき、親身なご指導を賜りました。ここに深く感謝申し上げます。

国際交流活動

ユカタン滞在記

国際文化言語論専攻
多元文化論講座 准教授
吉田　栄人

メキシコのユカタン半島に通い始めてからすでに30年が経っている。ユカタン半島での生活は短期の調査なども含めればおそらく3年を超えるだろう。それでもサバティカルにはユカタン半島を研究の地に選んだ。理由は色々あれど、現実問題として半年という期間を研究のために有効に利用するには仕方のない選択だった。半年は新しい土地で新しいことを始めるにはあまりに短すぎる。ユカタンの社会や文化を研究しているからユカタン半島に行かねばならないという必要性は必ずしもない。ドイツでもアメリカでもユカタンに関する研究はできる。ましてや、マヤ語に関する研究であれば、そういった国の大学に行った方が明らかに先進的な研究ができる。しかし、そういった国で研究する環境を整えるには私には十分な時間が与えられなかった。現実的な選択肢の中から選んだ研究環境がユカタン半島だったのだ。

シスビクチェン村小学校

私がいつもお世話になっている研究機関はユカタン大学にある野口英世地域研究センターだ。センターの頭に冠した野口英世とはもちろん黄熱病や梅毒の研究で有名なあの野口英世博士のことである。後に世界的な権威となった野口英世が1919年、ユカタン半島のメリダ市にあるオーラン病院で黄熱病の研究を行ったことから、その足跡を記す意味で彼の名前が付けられているのである。その野口英世地域研究センターの社会科学部門では1980年代からずっと研究者を主たる対象とするマヤ語の講座が開かれてきた。かねてより受講したいと思いつつも、マヤ語の学習を目的としてメリダ市に長期間滞在することができないため受講する機会にこれまで恵まれなかったが、今回やっとその念願が叶った。講座を最初から最後まで受講することはできなかったが、しばらくの間、月曜から金曜まで野口英世地域研究センターに通って毎日2時間から4時間マヤ語を勉強することができた。

メキシコでは1990年代以降多文化主義が社会的政策の主流となり、2002年には先住民言語権利法が施行されたことなどから、先住民言語の研究や教育を取り巻く環境は20年前に比べると随分と様変わりした。ユカタン州だけでも、マヤ語に関する教育・研究はユカタン大学だけでなく、メキシコ市にある国立メキシコ大学のユカタン支部やバジャドリー市に新たに開設された州立東部大学でも行われている。また、一般市民を対象としたマヤ語の教育ならびに啓蒙活動が盛んに行われるようになっているのも近年の変化の大きな特徴である。今回、ユカタンに滞在して驚いたのは、州立東部大学が中心となって企画された教育関係者を対象とするマヤ語研修に大人数の受講者がい

ることだった。メリダ市とテカシュ市、バジャドリー市の三カ所で毎週土曜日に授業が行われる。しかも、午前の部（8時から12時まで）と午後の部（15時から19時まで）がある。私はこの授業にも可能な限り出席させてもらった。できれば、日曜日もマヤ語を勉強していたかったのだが、残念ながら、日曜日だけは教える側の方が休みをとる日だった。

四六時中マヤ語の世界に浸れば、マヤ語の学習も進展するだろうと思い、実際に「村」に住み込むことも試みてはみたが、様々な理由（主たるものは時間不足である）でうまくいかなかった。結局、今回のユカタン滞在期間中に私は、マヤ語そのものを納得いくレベルまで習得することはできなかったが、マヤ語の教育や普及活動に関わる多くの人々と知り合いになることができた。

もちろん、調査・研究において知り合いの数が多ければ多いほどいいという訳ではない。しかし、私の場合、事情が多少異なる。マヤ語の文法解説書を作成することが現在の目標である私の研究において、多くの知己を得ることは決してマヤ語文法の理解に必要な情報の提供者が増えることだけを意味するのではない。むしろ、私が作成する文法解説書の潜在的なユーザが増えることを意味している。私に残された研究するための時間は決して多いとは言えない。私の研究がマヤ語の教育に実際に活かされるためには、さらなる努力と多くの時間が必要だ。建前でなく、本当に寝る時間さえ惜しい。ただでさえ、研究に没頭するあまり、雑事を忘れることは日常茶飯事だ。名目だけの業績が幅を利かす現在の日本の大学において、目に見える、しかも大学お墨付きの成果を出さない私の今の研究は在野の研究にも等しい。私の研究がいかほどのものであるのか、私には分からない。だが、分かる人には分かる。私が一番分かってもらいたいと思っているのは、現在マヤ語の復興のためにマヤ語の教育に携わっている人たちだ。今回のユカタン滞在はそうした理解者を探す旅でもあった。

研究紹介

国際文化交流論専攻
国際環境システム論講座 教授
山下　博司

ここ数年力を入れているのが、ヒンドゥー教のグローバリゼーションに関する研究だ。インドが経済開放政策に転じた1990年代以降に顕在化する超現代的な動きである。中間層の増大、IT技師などの世界進出、インド系ディアスポラの活況と民族的アイデンティティの再編・強化、ヒンドゥー・ナショナリズムの高揚、州政府レベルでのヒンドゥー教振興策、スリランカ内戦によるタミル難民の拡散などの諸要因が作用して、南アジア以外でのヒンドゥー司祭の需要が高まり、司祭たちの越境が加速している。私は、ヒンドゥー教がかつて栄えた国々を含む世界の場所場所を訪れ、グローバル化した民族宗教のありさまー伝統の維持と変容の問題ーを多面的に捉えようとしている。

今年だけでも、マレーシア、インドネシア、タイ、シンガポール、ドイツ、韓国に赴き、儀礼を観察し、司祭や信者と接して最新の知見を得てきた。年度中にドイツのハム市やカナダのトロント市などにも脚を伸ばし、欧米での南アジア系宗教の現状を精査したいと考えている。とくにトロントには、インド留学中の友人であるパンジャーブ系ジャーナリスト（スィク教徒）がスウェーデン系カナダ女性と結婚して定住しており、スィク教のグローバル化についての浩瀚な著述もある。2008年、シンガポールでの政府主催の文化イベントにゲスト講師として招聘してくれたシンガポール政府職員（スリランカ系カナダ人）も、職を辞しトロントの実家に戻っている。両氏からの生の情報を期待している。

調査で使う言葉は主に南インドのタミル語である。マドラス大学に6年間留学し、古代タミル文献の研究で学位を得た。だからタミル語にはさほど不自由しない。だがインドの言葉や英語だけでは十分でない。調査地によっては現地語の運用も必要になる。十数年来、ネイティブ話者のもとでマラヤーラム語、インドネシア語、タイ語を学んできたが、現地で多少の会話はできても、なかなか習熟には至らない。記憶力がめっきり落ちているのだ。もっと早くに始めていればとつくづく思う。

ヒンドゥー教との比較を兼ね、東南アジア・華人ディアスポラでの道教の問題も調べてきた。こちらは福建語、広東語、潮州語などの世界だ。英語に加え、昔かじった北京官話の乏しい知識も動員し四苦八苦しつつ人々と接する。ペナンでの調査活動が華人系記者たちの目にとまり、複数の華語紙に写真つきで紹介もされた（研究科HP「紹介記事」2006.10）。

以上は私が代表者を務める科研費2件のうちの1件の研究課題であり、かつ京都大学人文科学研究所や国立民族学博物館における共同研究の内容とも密に聯関している。今年度は、同じテーマで東京大学（大学院人文社会系研究科）で「印度語学印度文学特殊講義」があるし、東京外国語大学でも、やはり集中講義「言語学特殊研究」として標準タミル語文法を講じる予定である。調査研究に加え、成果の還元も等しく求められている。

本来の専門は、サンスクリット語、パーリ語、チベット語、漢語などによるインドの宗教文献学だ。本学でサンスクリットの授業も担当した「古典屋さん」である。それでも、私の知的好奇心を煽るのは、現代インド文化の動態、特に映画界の動きである。言葉の勉強にと通った現地の劇場で映画にはまって以来、傾けた蘊蓄と築いた人脈にはそれなりの自信がある。『ムトゥ 踊るマハラジャ』など、日本で上映されるタミル語映画の数々に字幕をつけ、ライナーノーツを書き、映画人との交流なども積んできた。インド映画産業の本まで著している。研究科HPで紹介された私についての英語やタミル語の新聞・雑誌記事（2010.9、2011.3, 2012.1, 2012.4）は、すべてインド映画がらみのものと言っていい。

研究したい。授業、指導、講座運営もある。どれも手抜きできない。日程をやりくりし、調査に出ては校務に滑り込むように帰国。ストレスもあって8年間ほど左耳は鳴りっぱなし、聴力も弱っている。自業自得だが、せめてこれ以上疲労をため込まないようにしたい。

写真：新加坡道教總會副主席・林金發（Mr. Ling Kin Huat）氏（中央）、及び城隍慈善基金会主任・胡雨群（Ms. Sara Tan）さん（右）とともに（2012年7月27日、出張先のシンガポールにて）

平成 24 年度科学研究費補助金採択一覧

8月7日現在

氏　名	研究種目名	研究課題名	
小野　尚之	基盤研究(B)一般	生成語彙意味論に基づく語彙情報と事象構造の融合的研究	
山下　博司	基盤研究(B)海外学術	ディアスポラにおける民族宗教の変質と再編－ヒンドゥー教と道教の動態的側面を中心に	
劉　庭秀	基盤研究(C)一般	東アジア地域における資源循環モデルの再構築－廃車由来のプラスチックを事例に－	
井川　眞砂	基盤研究(C)一般	マーク・トウェインと世紀転換期（1890―1910）－反帝国主義言説の修辞－	
藤田　恭子	基盤研究(C)一般	「在外ドイツ人研究」の制度化と禁忌化－マイノリティ論から見たゲルマニスティーク－	
黒田　卓	基盤研究(C)一般	イランにおける「近代性」との邂逅の現場	
胡　云芳	基盤研究(C)一般	非市場部門のマクロ動学分析	
佐藤　透	基盤研究(C)一般	日本的美意識の哲学的基礎づけ－侘び・寂び・幽玄を中心に－	
山下　博司	基盤研究(C)一般	中世タミル語の聖徒列伝『ペリヤ・プラーナム』の批判的翻訳と文学的・思想史的研究	
鈴木美津子	基盤研究(C)一般	ロマン主義時代における国民小説の誕生とその変容	
石幡　直樹	基盤研究(C)一般	メアリ・ウルストンクラフトにおける国家と女性の進歩の概念の研究	
小林　文生	基盤研究(C)一般	物語とアイデンティティに関する理論的研究	
坂巻　康司	基盤研究(C)一般	近代日本におけるフランス象徴主義受容に関する総合的研究	
吉田　栄人	基盤研究(C)一般	ユカタン・マヤ語復興活動における言語学的知見の実践と応用	
米山　親能	基盤研究(C)一般	Web4u を活用した初級・中級フランス語ｅ-ラーニング教育の応用的研究	名誉教授
岡田　毅	基盤研究(C)一般	日本人科学研究者向け英語学術論文執筆支援用教材システムの開発	
勝山　稔	基盤研究(C)一般	戦前期において支那愛好者が果たした文化受容活動の実証的研究－－井上紅梅を中心に	
市川真理子	基盤研究(C)一般	初期近代イギリス劇における視覚的表現手法の演劇空間論的観点からの研究	
澤入　要仁	基盤研究(C)一般	南北戦争と大衆誌の応砲―讃歌・式典詩の社会的機能から音楽・美術への文化的影響まで	
佐藤　研一	基盤研究(C)一般	十八世紀ヨーロッパの描く異邦人像－－ドイツとイギリスの通俗劇を中心にして	
藤田　緑	基盤研究(C)一般	トポスとしてのアビシニア－－近代日欧におけるアフリカ認識の変転	
鈴木　道男	基盤研究(C)一般	新世代ディアスポラの系譜書き換え－告発の文学の求心性とダブルバインド	
Narrog Heiko	基盤研究(C)一般	文法化と意味図構築の基礎的研究	
杉浦　謙介	基盤研究(C)一般	移動型多機能端末を活用した外国語教育－実践のための総合的研究－	
小原　豊志	基盤研究(C)一般	人種のポリティクス－白人性の解体分析をつうじた南北戦争・再建期像の再構築－	
深澤百合子	基盤研究(C)一般	禁農モデルを検証しアイヌ農耕文化の実態を解明する	
柳瀬　明彦	基盤研究(C)一般	ストック外部性と戦略的相互依存関係の下での国際貿易に関する理論的研究	
大東　一郎	基盤研究(C)一般	発展途上国における貧困削減と再生可能資源保全の両立可能性に関する動学分析	
青木　俊明	基盤研究(C)一般	社会基盤整備を活用した協調社会の促進とコミュニティ再生	
ﾌﾞｼｭﾊﾗｰﾙ ﾃﾞｨﾆﾙ	挑戦的萌芽研究	ヒューマンセキュリティの観点から考察する大震災後の再定住に関する調査	

最近の著作から

寺本　成彦
教授

著 者 名：レイラ・ペロネ＝モイセス、エミール・ロドリゲス・モネガル
書　　名：ロートレアモンと文化的アイデンティティー
　　－イジドール・デュカスにおける文化的二重性と二言語併用－
訳 者 名：寺本成彦
出版社名：水声社
発行年月：2012 年 1 月 20 日
価　　格：2,500 円

ロートレアモン伯爵という筆名で知られる 19 世紀フランスの詩人イジドール・デュカスが、スペイン語を文化＝教養の言葉として用いるウルグアイ人でもあったという事実に立脚し、ポストコロニアル的な視座も交えながらロートレアモン研究に新たな地平を切り拓こうとする論考の邦訳。『マルドロールの歌』と『ポエジー』を複数の言語・文化コードの間を振幅しながら生成するテクストとして捉えることで、従来から論じられてきたこの二作品の間テクスト的・カーニヴァル的諸相に、歴史・社会的文脈に深く根ざしながら生成・変成する言語 ― 文化的主体のダイナミズムを組み入れる可能性を提示する。また、19 世紀スペインの修辞学者エルモシリャによる修辞学教科書およびスペイン語訳『イリアス』（両方ともデュカスの蔵書）を精査し、従来は両立不可能なまでに矛盾すると見られてきたデュカスの両作品の文体上・内容上の対立の底流に、スペイン･バロックの色濃い影響を浮かび上がらせることができた。さらに、ヨーロッパ本国という遠隔地から流入してくる言語･文化を「錯時的共時性」によって受容しつつ、混成的な文化・言語・文学を産出する運命と可能性とを荷わされたラテンアメリカ作家の一人として詩人を位置づけ直すことで、その突然変異的な文学言語の先進性および豊饒性がより正確に再認識されている。

着任のご挨拶

国際交流論専攻
国際環境システム論講座 准教授
青木　俊明

四月一日付で国際環境システム論講座 准教授として着任いたしました青木俊明と申します。この場をお借りして、着任のご挨拶をさせていただきたく存じます。

まずは自己紹介をさせていただきます。出身は群馬県前橋市ですが、本学工学部原子核工学科を卒業した後、本学情報科学研究科に進学し、そこで修士号と博士号を取得いたしました。学部卒業時は、都市・地域計画を学びたいと思い、工学研究科土木工学専攻を受験したのですが、教養部改組のタイミングと重なり、進学予定の研究室が情報科学研究科に移行したため、情報科学研究科への進学となりました。その後、本学経済学部で助手として一年間、国土交通省 国土技術政策総合研究所で研究員として三年間勤務したのち、東北工業大学にて十年間勤務いたしました。東北工業大学勤務時には、米国の Duke 大学に八ヶ月間、滞在させていただきました。

私の場合、経歴上、原子核工学科に始まり、異なる分野を渡り歩いているように見えますが、私自身の専門分野は院生時代から変わらず、基本的には都市・地域計画を専門としております。ただ、国土交通省勤務時代に、それまでとは研究アプローチを大きく変えたため、現在では、「都市計画」というよりも「環境心理学」と表現した方が適切なように感じております。

環境心理学は、「人間を中心とする視点から、広い意味での環境問題（自然環境と社会環境の少なくとも一方に関わる問題）を改善し、人々の幸福感や社会的厚生を高める方法を探るための学問分野」と言えます。しかし、歴史が浅いため、学問分野としての知識体系が確立されておらず、多様な研究や実践活動が混在しております。私自身は、社会心理学を応用し、都市問題の改善に資する公共政策を提案することを研究方針としております。具体的には、①合意形成および向社会的行動（環境配慮行動を含む）の促進策、②居住地選択行動からみたコンパクト・シティの促進策、③購買行動からみた中心市街地活性化策、④ソーシャル・キャピタルと Quality of Life の改善策、といったテーマについて、人間の行動を理論化し、人々の行動を社会的に望ましい方向に導く方策を研究しております。

次に、今後の抱負を述べさせていただきます．着任後、最初に感じましたことは、研究環境の素晴らしさです。前職は私立大学だったため、大学過剰の時代のなかで志願者確保に注力せざるを得ない状況でした。多くの私大がそうであるように、文献レビューもままならないというのが正直な感想です。それに対し、東北大学では、講義に TA も配置でき、会議も少なく、研究に専念できる環境が整っております。日本の私立大学の大部分が非常に厳しい状況にある一方で、このような恵まれた状況に身を置かせていただくことの社会的な責任も感じております。二年目以降もこの環境が変わらないことを祈りつつ、その責任を果たすべく、研究と教育に邁進して参りたいと存じますので、ご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

退任の挨拶

国際地域文化論専攻
アメリカ研究講座 教授
井川　眞砂

退任のご挨拶 ―国際文化研究科で過ごした12年

2000 年 4 月に着任以来、定年までの 12 年間を本研究科・教授として在職しました。すなわち、私の教員生活 40 年の最後のほぼ 3 分の 1 を本研究科で過ごしたことになります。ほんのひと昔まえとはいえ、着任当時はまだ第 1、第 2 専攻だけであり、女性教員の数も圧倒的に少なく、たった 1、2 名を数えるだけだった時期かと思います。そのころの教授会は毎月開催され、臨時教授会や研究科内各種委員会の頻度も多く、したがって教員の多くが、現在よりもずっと頻繁に研究科の運営に直接参加していたかと思います。加えて、当面する問題を抱えていたため、金曜日の午後の定例教授会はたいてい長時間に及び、夜 8、9 時はおろか、10、11 時になることさえ少なくなかったことが、つい思い起こされます。しかし何といってもこの間のもっとも大きな出来事は、国立大学の法人化だったといえましょう。国立大学協会をはじめとする全国大学人の異議申し立てにもかかわらず、それは 2004 年（平成 16 年）4 月より実施され、国立大学のこれまでの在りようは大きく変貌しました。かつて「大学自治」を唱え「産学協同に反対」してきた国立大学は、今は昔。この歴史的な大転換を、私は東北大学在職中に本研究科教員として経験することになりました。

その前年の 2003 年、法人化に向けた準備が学内で始まり、本研究科でも「中期目標・中期計画」案の策定が、将来計画委員会に設置されたワーキング・グループでスタートしました。忘れ得ぬ事をあげるとすれば、この作業に座長として参加し、「中期目標・中期計画」を起草したことになりましょうか。本学文学研究科が「人類の知の継承と発展」を目標とするならば、文理融合の本研究科は「新しい知の枠組みの創造」でいきましょう、文学研究科と正々堂々棲み分けて本研究科で教育と研究に励みましょう、などと考えながら作業を進めたように思います。みなで何度も議論し、書き改め、それでもまだまだ「重厚さ」に欠けるといった指摘を受けながらの起草でしたが、その「中期目標・中期計画」のうち、現在、たとえば「サバティカル制度」がすでに実現・運用されていることや、上水道の「鉛管」が職場の安全委員会のご努力などにより「安全」なものに交換されたことなどは、いろいろ思い起こす中でも内心とても喜んでいる、忘れえぬ事柄になろうかと思います。

末筆になりましたが、国際文化研究科の今後の発展をこころから願ってやみません。

国際地域文化論専攻
イスラム圏研究講座 教授
北川　誠一

銀の時代を生きて

私が北海道大学文学部の３年生になった春、新築校舎の中の東洋史研究室にはイランから届いた図書が積み上げられていた。表紙に赤い椿の花が印刷された大判のペルシャ語訳付コーランが今でも目に浮かぶ。恩師が東洋文庫のために収集されたイラン出版の文献の数々で、彼は自分の研究室のためにも同じ物を買われたのだった。敗戦によって崩壊した我が国の西アジア研究が再生に向かおうとする時代であった。主としてセルジューク朝からチムール朝までの歴史書からなる新収ペルシャ語文献の山を目にして、私はイラン史研究に進むことを決意した。日本西アジア史研究の金の時代は始まっていたのだ。それを見て育った我々の年代は、銀の時代であるだろうか。さて、先ず、ペルシャ語はロンドン大学でアン・ラムトン教授のペルシャ語授業に出席しておられた助教授に教わり、文法書もラムトン先生著の『パーシャン・グラマー』であった。下宿代が２万円のころ 8,400 円の辞書のペルシャ語英語辞書も買った。文法はそそくさと終わり、テキストに進んだが、授業は月曜の１講目で前の夜はいつもほとんど徹夜だったが、これが、私がイラン中世史研究へと進む第一歩だった。前任の弘前大学では専門を生かして、ペルシャ語文法と史料講読を持ったが、本学国際文化研究科では専門語学の枠がないので、全学教育で１セメと２セメの科目を組み合わせ何とか通年で教えることができた。

銀の時代には、欧米ではなく現地へ留学する道が開かれた。但し、1980 年前後、イランは混乱の極みにあり、研究のための条件は悪かった。しかも、学術振興会を通した日本とソ連の相互派遣の制度が始まったばかりであったので、中世には同じ歴史世界に属していて、研究も進んでいたコーカサス留学を決意した。これらの国々で気がついたことは、中世史研究が、時代の政治や社会的規制に深く結びついていることだった。第１はマルクス主義史学の箍であったが、それは緩みつつあった。第２の制約は国民主義歴史記述であった。コーカサスの３カ国は民族の存在を前提として構築されていたので、それは民族の歴史たらざるをえないが、国境や民族自体が歴史的構成物であるとすると、本源的国民史観は様々な矛盾を抱え込む。そのため、ソ連崩壊以降は国家間、民族間の問題の多くが、過去の歴史的事実にかかわることになった。そこで私も中世史だけではなく、現代史・現代政治の勉強もすることにした。あくまでも勉強であって、研究のつもりではなかったが、本学に着任してからは、主として、コーカサス現代政治にかかわる講義と論文指導をしてきた。

中世史と現代研究の２つの方法論から行った研究は、地域研究と呼ぶべきであるが、地域をどれだけ全体的に理解できたどうかには、全く自信が無い。時間・経費・場所を必要とする方法で、そもそも１人で何でも抱え込むのは難しい。嬉しいことに数名の若い優秀な研究仲間を得たが、更に地域に関する知識を統合するシステムが必要で、これはコーカサスに留まらずあらゆる地域についても言えるだろう。思うところがあって最終講義は行わなかったので、行った場合に言いたかったことを書き留めた。

国際文化交流論専攻
言語コミュニケーション論講座 教授
宮本　正夫

東北大学大学院国際文化科で過ごした八年

三十二年間の主にカナダでの海外生活から戻り、国際文化研究科にお世話になった時には六ヶ月もあれば日本の生活に慣れると思ったが、実際には四年かかり、結局は 60％程までは文化慣習に慣れしたしむことができたが、残りの 40％は無理であった。

国際文化研究科で過ごした八年間、意義あると思う事が三つあった。一つ目は、加齢医学研究所のホルヘリエラ准教授との交友。十年に一度しか出会いない親友と呼べる人であった。彼が率いる医学・薬学・工学・物理学など異なった研究背景を持つ研究員達による勉強会に週一度参加し本当に学ぶことばかりであった。文系の私がそのような分野を直接学ぶ機会があったことに感謝するばかりである。私と同時期に東北大学に就任しまた時期を同じくしてフロリダの大学に移ったことも何らかの奇遇であろうか。

二つ目は、院生達との接触。言語コミュニケーション論講座で直接指導に携わった院生の多くは中国からの留学生であった。卒業後、世界で一番大きい会計監査会社に就職した者、総長賞をいただくほどまでに業績を積み、本国の大学で教鞭をとる者など。また講座を超えて、トロント大学などの北米の大学院で無事に博士課程を取得した者など。さらには、加齢医学研究所で共同研究を行った院生など。頭脳とやる気の両方を供えたそれら院生達との切磋琢磨は意義あるものであった。

三つ目の意義ある経験は、震災。食べ物もほとんどない仙台市内を彷徨するなかで、仏陀が説くように、命がどれ程までにはかなくもありまた尊いものであるのかを体験させられた。定年退職後は、東南アジアに戻り、出家し直す予定でいたが、二十歳代の八年間タイ・スリランカなどでの出家生活は身体的には酷なものであった。死はいつでも起こるもの、死に急ぐこともないと考え直し、仙台で退職後を送ることに決めた。自らがこれまでに学び、人に教え伝える価値のあるものは「英語」と「仏教」しかないと思っている。この世を去るまでは、教鞭をとり、また、筆をとりながら、その二つを人々に伝える生活を送るつもりでいる。

外国ボケで 40％ピントのずれた下品な大阪育ちの人間が、大きな問題を起こすことなく八年間無事国際文文化研究科で過ごすことができたのは、教員および職員皆様の寛大さによるものと思っている。感謝いたします。

山田 誠 教授 追悼

国際文化言語論専攻
言語科学基礎論講座 教授　川平　芳夫

本研究科言語科学基礎論講座教授・山田誠先生は去る平成24年5月1日に急逝されました。

本講座は平成21年度の講座改編により、旧言語生成論講座と旧言語システム論講座から2名ずつ教員が合同し教員4名の講座として出発しましたが、その年度末に楠田格先生が定年退職されたため、22年度からは山田先生、高橋、川平の3名で講座の教育と運営にあたってきました。山田先生は新講座設立の重要な課題にご尽力され、23年4月には教授に昇任されて、さあこれから本格的に講座を発展させるぞと意欲的に取り組んでおられたまさにその矢先、去る4月10日の講座の演習に出席された週末に体調不良を覚えられ、翌週月曜日に入院されました。その時は大型連休前に退院できる見通しでしたが、入院中に容態が急変し、5月1日に52歳という若さで帰らぬ人となられました。先生のこのような不条理で過酷な運命に対し私たちはまさに断腸の思いであり、この悔しさを表す言葉も見つかりません。

先生は昭和35年栃木県のお生まれで、58年3月本学文学部卒業、61年3月同文学研究科博士課程前期2年の課程修了、同後期3年の課程に進まれたのち、62年5月に同課程を退学されて本学文学部助手を2年勤められ、平成元年4月に本学教養部に講師として着任、平成4年4月助教授に昇任されました。5年4月教養部廃止に伴って設置された言語文化部に配置替えとなり、13年4月に本研究科に新設された国際文化言語論専攻・言語システム論講座に配置換えとなり、21年4月に講座改編により新設された言語科学基礎論講座に移籍されました。その間、平成7～8年にはHarvard大学言語学科客員研究員を勤められ、また平成22年3月に東北大学より博士の学位を授与されています。

先生のご専門は言語学で、Noam Chomskyが提唱した生成文法理論に基づいて「人間が言語を操ることができるのは脳にどのような言語知識があることによるのか」「英語や日本語の様々な文がどのような構造を有するのか」といった難問に仮説を立てて迫っていく研究を推進されました。英語動名詞構文、外置構文、日本語かき混ぜ構文について独創的な仮説を打ち立てられ、特に動名詞構文は先生のライフワークと言うべき研究テーマで、これに関する研究『A Generative Linguistic Analysis of Gerundive Constructions in English』により東北大学より博士の学位を授与されました。

先生の教育活動はこのような言語研究の成果を十分に生かしたものでした。本研究科に移られてからは院生に対して専門的な知識に基づいて常に懇切丁寧に指導を行い、日本や中国の大学教員を多数育成されました。また教養部着任時より一貫して英語教育にひたむきな情熱を注がれました。毎年必ず授業の内容や方法を改善し、非常に難度の高い教材を使って訳読レポートや英作文レポートを学生に毎週提出させるなど、学生と真剣勝負で向き合う授業を実践され、学生から効果のある授業と高く評価されていました。

先生が最後に購入された本は『日本の英語教育200年（伊村元道著、大修館書店）』と『Basic Linguistic Theory I & II (R. M. W. Dixon著、Oxford U.P.)』で、これらを読みかけにしたまま先生は旅立たれましたが、今頃はもう読了されたでしょうか。先生は、大変明るく誠実なお人柄で、ご家族を深く愛され、友人・学生を大切にされていましたので、今頃は天国で同様に過ごされているように思われてなりません。

最後に先生のご冥福を深い心よりお祈り申し上げお別れの言葉とします。

思い出

国際文化言語論専攻
言語科学基礎論講座 教授　浅川　照夫

山田君の淹れるコーヒーはとても濃かった。マグカップに注ぐ量は7分目くらいまで。考えが煮詰まって袋小路に入ったとき、ほっと一息ついたとき、彼の部屋にはしょっちゅうお邪魔した。分厚い羊羹をご馳走してくれたり、賞味期限が切れたけれど食べても大丈夫そうなお菓子を出してくれたり、英語教育の話、言語学の話、同郷ということもあって故郷のよもやま話など、何時間もつきあってくれた。聞き上手だったから、それじゃと部屋を出ると、不思議と前向きな気分になれていた。いつも穏やかだった。それでも時には、話に熱が入って、濃いコーヒーが嫌になるほど苦く感じるときもあった。

ある雑誌に載った論文を酷評していて、例え話にと、私の子供のころの苦い経験を話したことがある。もともと実験とか観察とかが好きなタイプではなかったから、夏休みも今日で終わりという日まで、理科の宿題を放っておいたのだ。焦った私は、鉄瓶に水を入れて石油コンロに乗せ、マッチで芯に火を付けた。やがて鉄瓶の底から水蒸気の粒がぷくっぷくっと上昇し始める。私は、水が沸騰するまでを短い観察文を添えて数枚のスケッチにまとめ、こうして、わずか10数分で、とんでもない観察記録「お湯の沸くまで」が仕上がった。この恥づかしい経験が今も頭から消えないでいると話したら、山田君は軽くフッと笑った。「お湯の沸くまで」か、そんな論文が溢れているからね。彼は呆れたような、情けないような顔をしていた。自戒を込めつつ、「お湯の沸くまで」は、彼と私だけに通じる隠語となった。

音声学の話ではコーヒーがいつになく苦かった。学生たちの英語の発音があまりにもお粗末なことに、山田君も私もひどく憤慨していた。何と、彼は、音の何たるかの基本ができていないからだと、一般教養の授業で音声学のテキストを使い始めた。私からすれば、発音は実践あるのみ、理屈は不要。しかし、彼は、外国語を学ぶ者なら誰にでも音声学は大事だと譲らなかった。彼は、最近の言語学が音声学を軽視していることに不満だった。言語学が経験科学だとはよく言われるが、本当に科学の名に値する言語学を求めたかったのかもしれない。

彼は何はともあれ英語を学びたい人だったと感じる。新しい言語理論をいち早く身に付け、言語データをスパッと切ってみせる今風の言語学状況に身を浸してはいたが、時代に左右されない、より確かなものの研究に舵を切りたい様子だった。英語教育はその一つ、日本語の起源を探る類型論のデータ収集には大いに興味を示していたし、何よりもPoutsma5巻はわざわざそのためにとっておいたようなもの。あれ要らなくなったら引き取るからね。今年初め、何年も前から繰り返していた言葉を本気とも冗談ともつかず投げかけたら、持っていてくれていいよ、読んでくれる人のところにあった方がいいから、と思いがけない返事があった。あの時、彼は何を見ていたのだろう。

誰にでも人生の分岐点があって、そこで歩みを止められないから、もう一歩のために逡巡する。長い人生を生きていけば振り返って懐かしむこともできるのに、山田君は、中途で、生と死の分岐点、曲がり道でも三叉路でもない、超えたら戻れないボーダーラインを跨いでしまった。この病気は治らない、薬で抑えているだけだよ。どれだけの未来を見つめながらそう言っていたのか分からないけれど、まだまだこちら側にいてくれれば、それだけでよかったのにと、本当にそう思う。

東北大学大学院
国際文化研究科 広報 No.25
○東北大学大学院 国際文化研究科 広報 No.25／平成24年9月
○編集／東北大学大学院 国際文化研究科 広報委員会 〒980-8576 仙台市青葉区川内41 TEL:022-795-7556

INFORMATION

国際文化基礎講座（公開講座）

第18回公開講座は、「災害を生きる―その文化的諸相―」と題して、平成23年11月12日㈯・19日㈯・26日㈯の三日間に渡って開催されました。東日本大震災（同年3月11日発生）からの復旧・復興の努力が懸命に続けられる中、自然の中で生きる人間が避けては通れない災害という問題を、改めて国際的・文化的視点から捉え直してみようという試みでした。初回は柳瀬明彦先生が国際経済学・公共経済学の視点から「災害リスクとインフラ整備―ヒト・モノ・カネそれぞれの視点から―」というテーマで、第二回目は石幡直樹先生が環境文学批評の立場から「自然の畏敬 ―日本とヨーロッパに見る風景の受容―」というテーマで、第三回目は劉庭秀先生が環境政策学・環境システム論の観点から「震災廃棄物の適正処理と再資源化―資源循環型震災復興モデルへの政策提言―」というテーマで、それぞれお話しいただきました。震災の影響で例年とは異なる会場での開催となりましたが、参加者の皆さんの関心も高く、講義後の質疑応答も活発に行われました。また、最終日にはお茶を飲みながら講師の先生を囲んで自由にお話しいただくラウンド・テーブルも行なわれ、参加者の皆さんは三人の先生を囲む輪を移動しながら、時間の許す限り熱心に議論をなさっておられました。心配された大きな余震もなく、昨年同様多くの皆さんにご参加いただき、公開講座は無事終了いたしました。（佐藤　透）

第19回東北大学国際文化学会の大会が開催されました

去る平成24年6月30日㈯、東北大学国際文化研究科一階会議室で第19回東北大学国際文化学会の大会が開催されました。昨年は東日本大震災のため前回大会が10月に延期されたため、今回の大会は例年と異なり9ヶ月の準備期間しかありませんでした。そのため発表者数の減少が予想されましたが、最終的には例年を上回る12名の発表者が日頃の研究成果を発表しました。特に今年は国際文化の大学院生のほか、山形大学や東北大学の講師をはじめ他大学からのエントリーも相次き、従来にも増して多彩な発表となりまして、大変な盛況となりました。また国際文化学会大会は大会の活性化を目的として、事前予約を廃止したほか、非会員も自由に参加できるようになっておりますので、皆様の積極的な参加をお待ちしております。（勝山　稔）

国際文化学会の公開講演会が開催されました

平成24年5月9日㈬東北大学国際文化研究科一階会議室で国際文化学会の公開講演会が開催されました。今回は首都大学東京の佐々木睦准教授が「漢字の国のアリス――幻想の文字」というタイトルで講演されました。特に今回は中国の漢字文化を、日本の漢字文化と比較しつつ眺めながら、「文字呪術」、「漢字と政治」、「漢字の妖怪たち」、「空間と文字」、「漢字の博物学」等々をキーワードに、中国人の漢字とのつきあい方が日本人とは大きく異なる点を様々な事例から紹介されました。佐々木先生の紹介された事例は大変面白いものばかりでしたが、これらの事例は実は民族的思考や社会、政治と深く結びついているという点まで言及され、参加者も大変熱心に聴講しておりました。（勝山　稔）

ジゼル・ベルクマン氏講演会

去る平成24年7月23日、パリの国際哲学コレージュでプログラムディレクターとして活躍するジゼル・ベルクマン氏をお招きし、『カタストロフィの思想―苦しみと共に思考すること―』と題する講演会を研究科主催で開催した。18世紀啓蒙期のフランス文学・思想を専門とし、20世紀文学・思想にも造詣が深いベルクマン氏は、「3.11」という当事者の私たちにとってさえ未だ十分には言語化しきれていない問題に独自の考察を加え、その普遍的な射程を見定めようとした。「破局（カタストロフィ）」の原義である「激動、終わり、物語の結末」をも無効にする「カタルシスなき破局（カタストロフィ）」、「緩慢で希薄化された、継続する破局（カタストロフィ）」をいかに思考できるのか。心的外傷（トラウマ）を残しかねない出来事の生々しさをいかに言語化し、後世に伝えるのか。さらに「現地の反原発グループと、国家を超えた、あるいは国家内にとどまるグループとをいかに連携させるか」。それが「3.11」を経験した聴講者にベルクマン氏が示した課題である。

今回の講演は、遠くフランスの地にありながら「3.11」を真摯に受け止めてきた一人の哲学者・思想家が、出来事の“現場”でその当事者である私たちを前に行ったものであった。講演前日には実際に南三陸町などの被災地訪問を果たすなど、講師にとっても格別の思いがあったようである。会場に多数集まった市民、学生、教員からの質問に丁寧に回答するベルクマン氏の姿勢が印象的であったことも付記する。

最後に、今回の講演を可能にしていただいた西山雄二氏（首都大学東京）のご配慮に感謝する。（寺本　成彦）

オープンキャンパス報告

今年もオープンキャンパスが7月30日、31日の両日開催され、国際文化研究科には去年を353名も上回る912名の見学者があり大変盛況でした。昨年はそれまでの研究科のオープンキャンパスの雰囲気を一変させ、多くの人に来てもらえるようになりましたが、今年はさらに一層の盛り上がりを見せていました。研究科の紹介に加え、留学生たちと様々な文化やことばについて語り合うコーナーを設けましたが、参加者たちには楽しみながら国際文化研究科の研究や教育の一端を知ってもらったと思います。来年もこのような企画を通して魅力的な研究科紹介を行っていきたいと思います。

（小野尚之）

入学を希望される皆様へ

次の入学試験（春季入試）は、
平成25年2月14日㈭、15日㈮に行われます。

本研究科は、柔軟な思考力と広い視野および一定の語学力を有して、国際舞台で活躍できる創造的研究者または高度専門職業人になろうという明確な目的意識を持った学生を求めています。

詳しい入試情報については、本研究科ホームページ
http://www.intcul.tohoku.ac.jp/?num=100521151426 をご覧ください。

お問い合わせは、本研究科教務係において受け付けています。

連絡先
東北大学国際文化研究科教務係
TEL: 022-795-7556 / FAX: 022-795-7583
E-mail: int-kkdk@bureau.tohoku.ac.jp

編集後記

平成24年度「国際文化研究科広報」をお届けいたします。今回の研究科長インタビューでは、研究科長から研究、人生両面にわたり院生諸君の励ましになるような踏み込んだ内容の話を聞かせていただきました。昨年の震災後のボランティア活動に従事した院生諸君からは貴重な体験の報告をいただきました。原稿執筆、およびインタビュー参加にご協力くださったすべての方々に感謝いたします。（編集担当）